

関西テレビ放送賞

「咲き続ける命」

履正社学園豊中中学校

三年

徳山 とくやま

佳浩 よしひろ

家に帰ると、リビングでお母さんが泣いていた。「ただいま。」と声をかけると、「おかえり。」とこたえるものの涙が止まらないようだった。手には新聞があった。お母さんはふだんからよく泣く。感動しては泣き、うれしくて泣き、くやしくて泣き、楽しくて泣き、幸せだと言っては泣く。いそがしい人だ。そんな人だから、また何かの記事を読んで泣いているんだろうと思いつながら聞くと、お母さんは『人に優しくなれるつらさ』という記事を差し出した。それは幼い子どもの脳死による臓器提供と臓器移植の記事だった。

臓器を提供したのは、心臓のポンプ機能が衰える拡張型心筋症で補助人工心臓を装着した六歳の女の子だ。この女の子は、心臓移植に向けて渡航の準備中だった。それなのに、心臓でできた血栓が脳の血管を詰まらせる病気を発症し、脳死と判定されたそうだ。そして、その女の子の臓器の移植を受

けたのは、大病を患って、生まれてからほとんどの期間を人工呼吸器につながれて生活してきた八歳の女の子だ。

幼い女の子二人が重い病気に長い間苦しんでいたという話だけでも胸がとても苦しかった。しかし、それ以上に苦しかったのは、臓器を提供した女の子の両親のコメントだ。そのコメントにぼくは涙をこらえることができなかった。

「娘がほぼ脳死状態であることがわかった時、心臓移植待機中のことを思い出しました。国内では臓器移植が少ない現状を強く感じましたので、迷わず娘の臓器を移植待機中のお子さまやご家族のために提供したいと申し出ました。私たちは娘が発病してからの三か月間、暗闇の中にいました。同じようなお気持ちの方に少しでも光がともせたらと思っています。」

記事を読み終えて、女の子の両親がどんな思いで決意されたのだろうと考えた。心臓は一人の人間に一つしかない欠かすことのできないものだ。元気だった自分の子どもがある日突然、心臓移植しか「生」きる道はないと告げられる。しかし、心臓移植を待つということとは、誰かの「死」を待つということだ。移植を受けて娘や家族の幸せをつかみとるという「希望」の向こう側には、最期のときを感じながらも一分一秒でも長く生きてほしいという、別の家族の「絶望」がある。希望を抱き、一日も早く臓器を…と、願うことの「いたたま

れない罪悪感」は、ぼくには想像もつかない。「生きる」ために「死」を待つことは、どれほど苦しくて悲しくて辛いことだろう。

しかし、その願いがかなわず脳死と判定された時、女の子の両親は、移植待機中の子どものことや、国内での臓器移植のきびしい現状を思い、迷わず娘の臓器提供を申し出たという。そして、その思いによつて、もう一つの家族は生きる「希望」をもらった。この助けた女の子にも、助かった女の子にも、かける言葉がぼくには見つけれられない。生きる喜びの前に、深い悲しみが二人の女の子に、そしてその両方の家族にあったはずだからだ。

新聞やテレビでは毎日、目をおおいたくなるような事件や事故が報道されている。飲酒運転の車がたくさんの命を一瞬でうばったり、誰でもいいから人を殺したいと殺人を犯す信じられない出来事が、いつ自分の身近で起きてもおかしくない。病気だつてそうだ。自分で気をつけていても突然やつてくる。意思表示ができなくなつてからでは遅い。自分のためにも、両親やまわりの人のためにも話し合い続けることが大切だと思い、ぼくは、お母さんとこの記事にあった臓器提供と臓器移植について話をしてみた。泣いていたお母さんと、重い空気の中で話すのがイヤだったぼくは、笑顔で話しかけ

た。

「これから先ずつと、多分、絶対にないことを願つてるけど、でも、もしもぼくがそういう状態になったら、臓器提供をしてほしいと思つてゐるねん。自分の心臓には長生きしてほしいやん。」と。

パシン！

「なんてこと言うの！もしもでも、そんな話せんといて！」お母さんに泣きながらしばかれた。予想外の反応に、ぼくは、お母さんに「ごめん。」としか言えなかった。現実起こっているわけではなくても口に出すだけで、一番そばにいる大切な人を、こんなにも悲しませることに気がついた。ぼくは、お母さんの悲しむ顔が苦手だ。

人の命にかかわる臓器移植は、それだけ尊いものなのだ。尊いからこそ、みんなが勇気を持つて話し合つていくことが必要なのではないだろうか。またいつか、お母さんと話をしてみよう。